論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

㊀・乙	氏名	福田　直樹
学位論文名	Mucosal Breaks Show Same Circumferential Distribution in Majority of Patients With Recurrent Reflux Esophagitis	
学位論文審査委員	主査	丸山 理留敬 印
	副査	大谷 浩 印
	副査	仁科 雅良 印

論文審査の結果の要旨

近年、本邦で増加傾向にある逆流性食道炎は、酸分泌抑制薬で治療が行われるが高頻度に再発することが問題であり、バレット食道およびそこから発生する食道腺癌のリスク因子としても重要な疾患である。逆流性食道炎で生じる粘膜傷害は重症度[Los Angeles (LA) grade]により特徴的な周在性を示すことが示されているが、再発時における粘膜傷害の特徴については検討がない。申請者は、再発性逆流性食道炎の粘膜傷害の重症度と周在性を調査し、初回診断時との比較を行うことで、その臨床的特徴を明らかにする目的で本検討を行った。対象は1996年7月から2014年6月までの期間に島根大学医学部附属病院で診断された、再発性逆流性食道炎114例である。申請者はこの対象患者に関して粘膜傷害の周在性と、臨床背景(初発時・再発時の年齢、再発までの期間、初発時・再発時のLA gradeなど）について後方視的に検討した。再発時の粘膜傷害は全体の72.8%でLA gradeが初発時と同じであり、軽症のLA gradeでは右前壁方向に、重症のLA gradeでは後壁方向に多く認められた。また、全体の84.2%で同じ方向に再発を認め、異なる方向に再発を認めた場合は、初発時と再発時の重症度が異なる傾向にあった。今回の検討から、逆流性食道炎は同じ重症度で再発することが多く、全体の8割以上で同一方向に粘膜傷害を生じることが明らかになった。本研究は再発性逆流性食道炎の臨床的特徴について新たな知見を示したものであり、逆流性食道炎の長期経過を評価する上で有用な成果と考えられる。

最終試験又は学力の確認の結果の要旨

申請者は多くの逆流性食道炎において、初発時と再発時とで重症度と発生部位が一致すること、及び異なった場所に再発した際には重症度が変化している傾向があることを見出した。同疾患の経過観察を行う上で重要な研究成果といえる。関連知識も豊富であり質疑応答も適確であり、学位授与に値すると判断した。

（主査：丸山 理留敬）

申請者は、初発と再発性逆流性食道炎の周在性と重症度が多く重なることを明らかにし、同疾患の病態生理の解明、ならびに長期経過の評価に資する有意義な知見を得た。関連分野の知識も十分であり、学位授与に値すると判断した。

（副査：大谷　浩）

申請者は再発性逆流性食道炎における重症度と周在性が、初発時と同様の傾向であること、および周在性が異なる場合は重症度が異なることを示した。これは本疾患の病態の解明に重要な知見である。また関連の学力も充分であり、学位授与に値すると判断した。

（副査：仁科 雅良）